

お伽芝居に就て

巖谷小波

▲明治四十年は恐らく文藝勃興の時代であるまいか。その氣運に乗じて兒童の多年渴望して居た、お伽芝居なるもの、新に芽を吹き出さうと云ふ兆のあるのは、僕等子煩惱黨の欣喜措かざる所である、

▲元來お伽芝居なるものは、先年川上貞奴一座が初めて我邦に演じて以來。暫時中絶の姿で其後左團次が莚升時代に二番目狂言として一寸試み近く大阪日報の記者が、大坂で旗揚をした位の事で實はまだ一向研究されて居ない、

▲尤も此春、本郷座の若手連中が、新聲館で一度演つた事もあるが、これは残念ながら、殆んど物に成つて居なかつた、随つて世間からも、何等の反響を與へなかつた様である、

▲然るに、氣運の然らしむる所は、いよゝゝある

一派の人々の手で、近々お伽劇専門の研究が初まり、やがては花々しく打つて出やうと云ふ、計畫さへあるに至らしめた、蓋し大いに賀すべき事であると同時に、一言念の爲め云つて置き度い事があつた。——それは一面演者に對して、一面看客に對して。

▲まづ演者に對しては、一も二も無く、子供氣と云ふ事を要求する。お伽囃を作る上に付いても然うだが、苟くもお伽芝居を演ずる以上、まづ自分自らが、子供になる氣でやらないでは、如何に熱心に演じても、其熱心は皆正鵠を反れて、一向子供之感興を惹くまい、

▲今までの演者を見るのに、大阪のはまだ見ないから知らないが、兎角芝居をするに云ふ方に傾いて、お伽と云ふ點を忘れた観がある、中には、お伽芝居などの子供だましは、馬鹿々々しくて本氣に成れないと、全く上ずつた演り方をする者もあつた。此等はお伽芝居の賊として、寧ろ樂屋へ入

れない方が可い、

▲又か伽芝居の中には、往々人間以外の鬼神、妖怪、天象、地精、動物、植物、時には器具、調度の類迄も扮して演らねばならぬ場合がある。其時の用意としては、まづその扮する目的物の、特性特質をよく呑込んで、所謂急所を掴かまねばならぬ、

▲己に急所を掴みさへすれば、必しも犬の縫ぐるみを着ないでも、また鶏の羽を纏はないでも、犬は犬らしく鶏は鶏らしく見えるのである。要するに輪廓は眞に迫まらずとも動作に骨を得て居れば躍々として其物が活きるのである、

▲それから白だが、これも脚本の示す所を、必ずしも一字々々暗誦するには及ばない、寧ろ其筋を十分呑込んでさへ居れば、時には自分拵への白を陳べても、却つてそれが活きて聞える。即ち白の上に於ても、器械的より意識的の方が、遙に優ると云ふ事を承知して貰ひたい、

▲又か伽芝居には、必しも型なるものは無い、強てそれを定めるならば、只見た目の美しく、面白く、無邪氣に、上品にあれば可いのだ、それには多く喋つて筋を通さうと云ふより、多く動いて意を判じさせるが優しだ、

▲尙一つの要件としては、音楽と振事の利用が欲しい、それも込み入つた物には及ばぬ。子供の耳に入り易く、目を樂ませる程度に於て、一ト工夫あれば更に妙とする。此點から云ふと、どうもお伽芝居なるものは、新派より舊派の物らし、

▲さて看客に對しては、——寧ろ社會一般に對しては、一つ斷つて置く事がある、それは他でも無いお伽芝居は讀んで字の如く、子供の伽の爲の芝居である。決して教育的の演劇では無い。強て教育分子を含ませるとすれば、それは智育や徳育の方面よりも寧ろ美育の點にあると云ふ事を、飽くまでも了解して居て貰ひ度い事だ、

▲此間京都でお伽劇の演ぜられた時、其地の所謂

教育家連中は、之に要求するに今少し教訓的の材料を以てしたさうだ、僕は聞いて腹が捻れてならない、

▲思ふに然う云ふ連中は、菓子屋で賣る饅頭や煎餅に胃散を入れよ、寶丹を混ぜよと云ふに等しく没理漢も甚だしいでは無いか尤も斯う云ふ偏狹な理窟は、お伽噺にも屢々浴せられる事だが、彼等は殆んど子供の氣を知らない、否、教育の本義を知らない、

▲子供は常に學ばねばならぬと同時に、また常に遊ばねばならぬ。然るにその遊ぶ時間にまで、學べくと責られては、何所に立つ瀬があると思ふ。而も其遊び方が趣味に富んで而も健全なものであるなら、なまじ偏屈な學び方より、何れ程益があるか知れないではないか、

▲此點から又僕は云ふ、このお伽芝居に對して強いて教育的なるを望む輩は、又斯道の寇として、木戸近くには寄せ付けぬなり、

▲とは云ふもの、何もお伽芝居だからと云つて決して教訓を排斥するのではない、むしろ大なる教訓を含ませるのが其上乗なものであるのだ、然し只その教訓が決して露骨で無い事を要する、

▲されば、偶々教育家の要求する様な、教訓材料を演ずるにしても、成るべく其の意を表面に顯はさず、見た目には飽くまでも面白く、出来るだけ美しく演つて貰ひ度い、

▲味噌の味噌臭きは、眞の上味噌にあらざる如く教訓の教訓臭いは、大なる教訓でないと思ふ事よく悟り得る程の達識を、僕は天下の兒童に代つて演者と看客とに望むのである、

